

小野田寛郎(おのだ ひろお)さんといえ
ば、大東亜戦争終結から29年間、フィリ
ピン・ルバング島で帝国軍人としてすご
し、帰国した方として有名です。

は、その小野田さんの名言です。



「なぜ30年もの間、頑張れたのか.....。

それは、生きる目的、果たすべき目的が
あったからです。なにもないのに頑張れないでしょう。
その生きる目的を果たすために、死んでもいいという覚悟を
するのです」

「サバイバルというのは、どんな困難な状況にあっても生き
る望みを失わないこと」

「(30年モルバング島にいて)これは国のミスなんだから
“失った時間を返せと賠償請求をしたらどうか”と言う人が
いました。

僕はいまこうして生かさせていいただいているんです。

死んでいった仲間もいるのです。

“僕はそんなに狭い料簡はもっていないよ”と笑って済ます
のですが」

「島で一番大事なのは健康です。そして健康でいるためには
頭をよく働かせなくてはダメです。

健康でないと、思考が狂い消極的になる。目標とか目的意識
が希薄になるんです」

「よく島でたった一人になって、孤独感はなかったかと聞か
れます。僕は孤独なんていうことはないと思っていました。
22歳で島に入りましたが、持っている知識がそもそもいろ
いろな人から授かったものです。すでに大きな恩恵があっ
て生きているのだから、決して一人で生きているわけではない
のです」

小野田さんが、何度も繰り返しておっしゃる言葉は、

「生きる目的」

「死んでもいい覚悟」

「一人では生きられない」です。

30年もの間、島でたった一人で闘っていた小野田さん。

その小野田さんが、

「人は一人では生きられない」

とおっしゃる。

そして「大きな恩恵があっ
て生きているのだから、決して
一人で生きているわけではない」とおっしゃる。

まるで人は木の股から生まれてきたのだ。個人主義がいいの
だという現代日教組教育の、まさに対極にある思想と生き方
がここにあります。

その小野田さんが、従軍慰安婦について書いている記事が
あります。

ご紹介します。

内容の濃い文章です。

原文をまるごとご紹介します。

http://www4.airnet.ne.jp/kawamura/enigma/2005/2005-01-16-onoda_ianhunoshoutai.html

私が見た従軍慰安婦の正体 - 小野田寛郎

首相の靖国神社参拝や従軍慰安婦の問題は、全く理由のない
他国からの言いがかりで、多くの方々が論じているところだ。
南京大虐殺と同様多言を弄することもあるまいと感じてい
たのだが、未だに妄言・暴言が消え去らない馬鹿さ加減に呆
れている。

戦後六十年、大東亜戦争に出征し戦場に生きた者たちが少な
くなりつつある現今、私は証言として、「慰安婦」は完全な
「商行為」であったことを書き残そうと考えた。

外地に出動して駐屯する部隊にとって、治安維持と宣撫工作上
最も障害になる問題は、兵士による強姦と略奪・放火である。
そのためにどこの国もそれなりの対策を講じていることは
周知の通りである。

大東亜戦争時、戦場には「慰安婦」は確かに存在した。
当時は公娼が認められている時代だったのだから至極当然
である。

野戦に出征した将兵でなくとも、一般に誰でも「従軍看護婦」
と言う言葉は常識として知っていたが、「従軍慰安婦」と
言う言葉は聞いた者も、また、使った者もいまい。

それは日本を貶める為に後日作った造語であることは確かだ。
淫らな言葉だが、中国戦線では「ツンコ・ピー」「チョウセ
ン・ピー」と呼んでいた筈であるが、他の人の見ている所
でする筈のないことだけに、「慰安所」のことも「慰安婦」の
ことも、公の場で自己の見聞を正確に発表する人が少ない。
あまり詳しいと「よく知ってるね」と冷笑されるのが落ちだ
ろう。

では何故、君は、と私に聞かれるだろうが、幸い私はその
実態を外から観察出来る立場にあったから、何も臆すること
なく、世の誤解を解くために発表することが出来るのだ。

漢口の「慰安所」を見学

商社員として十七歳の春、中国揚子江中流の漢口(現武漢)に
渡った私は、日本軍が占領してまだ五カ月しか経っていない、
言わば硝煙のにおいが残っている様な街に住むことになった。
当時、漢口の街は難民区・中華区・日華区・フランス租界・
日本租界・旧ドイツ租界・旧ロシア租界・旧英国租界に分か
れていて地区ごとにそれぞれ事情に合った警備体制が敷か
れていた。

日華区とは日本人と中国人とが混じって住んでいる地区で、
そこに住む中国人は中華区に住む者と同様「良民証」を携
帯しており、そうでない者は警備上難民区に住まされていた。
難民区は日本兵も出入りを禁止されていて、私たち留邦人
は届け出て許可を得なければ出入り出来なかった。それだけ
危険な場所だった。

私は、仕事が貿易商だから、難民区以外はよく歩いた。

ある日、汚れた軍服を着た兵士に「慰安所はどこか知りませ
んか」と路上で尋ねられ、一瞬思い当たらず戸惑った。

しかし看板に黒々と「漢口特殊慰安所」と書いて壁に掲げて
いて、その前に歩哨と「憲兵」の腕章をつけた兵隊が立っ
ている場所を思い出したのでその通り教えてあげた。

映画館と同様に日華区にあった。汚れた軍服から推測して、
作戦から帰ってきた兵士に間違いはない。街を警備している
兵士は、そんな汚れた軍服で外出してないからだ。

私は「特殊慰安所」か、なるほど作戦から帰った兵士には

慰安が必要だろう。

小遣い銭もないだろうから無料で餅・饅頭・うどん他がサービスされるのだろうと早合点していた。

ところが、私の知人が営む商社は日用品雑貨の他に畳の輸入もしていて、それを「慰安所」にコンドームなどと一緒に納入していたので「慰安所」の出入りが自由であった。

彼に誘われて一般在留邦人が入れない場所だから、これ幸いと見学に行った。

私たちは、憲兵に集金の用件を話してまず仕事を済ませた。日が暮れていたので「お茶っぴき」(客の無い遊女)が大勢出てきて、経営者と私たちの雑談に入ろうとしてきたが追い払われた。

そこには内地人も鮮人も中国人もいた

(現在、鮮人は差別用語とみなされ、使われない。しかし朝鮮半島が日本統治だった当時は「日本人、朝鮮人」などと言おうものなら彼らに猛烈に反駁された。彼らも日本人なのだからと言う理由である)。

群がってきた彼女たちは商売熱心に私たちに媚びてきた。

憲兵は特別な事情の時以外は、部屋の中まで調べに来ないからである。

料金は女性の出身地によって上中下がある。

また、利用時間も兵士は外出の門限が日没までだから日中に限られるが、下士官は門限が長く、将校になれば終夜利用出来る。料金も階級の上の方が割高で、女性たちは当然、同じ時間で多く稼げることになる。

半島出身者に

「コチヨ(伍長 下士官)かと思ったらヘイチヨウ(兵長 兵士)か」

「精神決めてトットと上がれ ネタン(値段)は寝間でペンキョウ(勉強)する」とか、笑うところではない涙ぐましいまでの努力をしているのも聞いた。

内地人のある娼妓は「内地ではなかなか足を洗えないが、ここで働けば半年か一年で洗える」といい、中には「一日に二十七人の客の相手をした」と豪語するつわものもいた。

どこにもいなかった「性的奴隷」

ここで親しくなった経営者の話を紹介しよう。

「体力的に大差がない筈なのに、内地人は兵士たちと言葉が通じるために情が通うのか、本気でサービスして商売を忘れ健康を害してしまう。そのために送り返さねばならず、経営者にとって利益が少ない。兵隊さんには内地人ばかりで営業するのが本当だが」と本音を漏らしていた。

私の育った街には花柳界があったので、芸妓と酌婦をよく眼にしたが、当時は玄人女と呼ばれた彼女たちの外出姿でも一般の女性と見分けることが出来た。

その目で見れば漢口の街でも同様だったが、特に朝鮮人の女たちは特色があった。

というのは彼女たちは数人で外出してくるのだが、民族衣装ではなく、着慣れないツーピースの洋装のせいで着こなしが悪く、また歩き方にも特徴があって一目で見分けられた。

彼女たちは実に明るく楽しそうだった。

その姿からは今どきおおげさに騒がれている「性的奴隷」に該当する様な影はどこにも見いだせなかった。

確かに、昔からの言葉に、「高利貸しと女郎屋の亭主は畳の上で往生出来ぬ」というのがあった。

明治時代になって人身売買が禁止され「前借」と形は変わったが、娘にとっては売り飛ばされた」ことには変わりはない。

先述の「足を洗う」とは前借の完済を終えて自由の身になることを言うのだが、半島ではあくどく詐欺的な手段で女を集めた者がいると言う話はしばしば聞いた。

騙された女性は本当に気の毒だが、中にはこんな話もある。「『従軍看護婦募集』と騙されて慰安婦にされた。

私は高等女学校出身なのに」と兵士や下士官を涙で騙して規定の料金以外に金をせしめているしたたかな女もいた。またそれを信じ込んでいた純な兵士もいたことも事実である。日本統治で日本語が通じた故の笑えない喜劇でもある。

ところで、その「慰安所」にどれだけの金 flowed のだろうか。

これが「慰安婦」が「商行為」であった確かな事実である。私の次兄が主計将校で、漢口にある軍司令部に直接関係ある野戦衣糧廠にいたので「慰安所」について次のような統計があると教えてくれた。

当時、漢口周辺には約三十三万人という兵力が駐屯していたが、ある理由で全軍の兵士の金銭出納帖を調べた。

三分の一が飲食費、三分の一が郵便貯金、三分の一が「慰安所」への支出だった。

貯金は給料の僅かな兵士たちにとって嬉しいことではなかったが、上司から躰として教えられている手前せざるを得なかったのが実情だった。

私も初年兵として一ケ年、江西省南昌にいたが、食べたいのを我慢して貯金した。

一人の兵士がそれぞれ三等分して使った訳ではないだろうが、人間の三大欲は食欲、睡眠欲と性欲と言われるだけに、貯金を睡眠に置き換えると全く物差しで測った様な数字である。

ちなみに当時の給料は兵は一カ月平均十三円程で、その三分の一を約四円として計算すると三十三万人で総額約百三十二万円になる。

「零戦」など戦闘機一機の価格は三万円と言われたが、実に四十四機分にも相当する。

サラリーマンの初任給が四十円そこそこの頃だったのだから、経理部の驚くのも無理のない話である。

以上が、私が商社員として約三年半の間、外部から眺め、また聞き得た「慰安所」と「慰安婦」の実態である。

私が漢口を去った昭和十七年夏以降に、漢口兵站(作戦軍の後方にあつて車両・軍需品の前送・補給・修理・後方連絡線の確保などに任ずる機関)の副官で「慰安所」等を監督した将校の著した『漢口兵站』と照合してみたが、地名・位置等について多少の相違点は見いだしたが、本題の「慰安所」について相違はなく、より内情が詳しく記されていた。

これでは誰がどう考えても「商行為」であるとしか言いようがないだろう。

「商行為」ではない、軍による「性的奴隷」であるとそれでも強弁するとすれば、知らな過ぎるのか、愚かで騙されているのか、そうでなければ関西人が冗談めかして言う「いくら貰うてんの？」なのかもしれないが、あまりにも馬鹿げた話である。

問題にして騒ぎ出す者たちの狙い

次に、軍関与の暴論について証言する。

私は二十歳で現役兵として入隊、直ちに中支の江西省南昌の部隊に出征した。

初年兵教育が終わって作戦参加、次いで幹部候補生教育、途中また作戦と、一ケ年一度の外出も貰えずに久留米の予備士

官学校に入校してしまったから、外出して「慰安所」の門を潜る機会に恵まれなかった。

だが初年兵教育中、古い兵士には外出がある。外出の度にお土産をくれる四年兵の上等兵に「外出でありますか」と挨拶したら「オー、金が溜ったから朝鮮銀行に預金に行くんだ」と笑って返事をしてくれた。

周りは周知の隠語だからクスリと笑うだけだった。

南昌には師団司令部があった。

「慰安所」には内地人も朝鮮人も中国人もいて、兵士は懐次第で相手を選んで遊んだのだろう。

私は幹部候補生の教育を、南昌から三十キロ以上も離れた田舎の連隊本部で受けた。

「慰安所」は連隊本部の守備陣地の一角に鉄条網で囲まれて営業していた。

教育の末期に候補生だけで本部の衛兵勤務につくことになった。もちろん勤務は二十四時間である。

私は営舎係だったので歩哨に立たないから何度も歩哨を引率して巡察に出た。

巡察区域の中に「慰安所」も含まれていた。

前線の歩哨は常時戦闘準備をしている。

兵舎内の不寝番でさえ同様だ。鉄帽を被り、銃には弾を装填し夜間はもちろん着剣である。

その姿で「慰安所」の周囲だけならまだしも、屋内も巡察し、責任者の差し出す現在の利用者数の記録を確認する。軍規の維持とゲリラの奇襲攻撃を警戒しているからである。

考えてみるまでもない、そこで遊んでいる兵士は丸腰どころではない。

もっと無防備で不用心な姿の筈である。

その将兵を守るべき責任は部隊にあるのは当然だ。

それに性病予防の問題もある。そんな田舎に医師や病院がある筈がない。

性病予防のため軍医や衛生兵が検査を実施するしかない。

「慰安所」の経営者は中国人だったし、日本では当時公認の娼妓と呼ばれた女たちも中国人だった。

彼らも食料やその他の生活用品が必要だ。

大人数なのだから、それなりの輸送手段もいる。辺鄙な場所だから部隊に頼る以外方法がない。

部隊が移動する時もそうなるだろう。

私の話す湖北省の言葉もだいたい通じたので、経営者と立ち話をして彼女たちについてそれなりの様子も聞き出せた。

今でも「慰安所」の両側に部屋のある中廊下を巡察した不粋な自分の姿を思い出すが、こんな漫画にもならない風景が現実にあったのだ。

これは私の部隊だけではないと思う。

もう六十年も昔のことである。

時代が変わり、また平時と戦時の違いもある。

したがって娼妓(ここでは慰安婦に相当する)に対する解釈も当然変化している。

そうであるにもかかわらず、すでに証拠も不完全になっていることを幸いに、今更これを問題にして騒ぎ出す者たちの狙いは何なのか。

言えることはただ一つ、不完全だからこそ喚き散らしていれば、何か得られると狙っているということだ。

戦場に身を曝し、敵弾の洗礼を受けた者として最後に言うておく。このことだけは確かだ。

野戦に出ている軍隊は、誰が守ってくれるのだろうか。周囲がすべて敵、または敵意を抱く住民だから警戒を怠れないのだ。自分以上に強く頼れるものが他に存在するとしても言うのならまた話は別だが、自分で自分を守るしか方法はないのだ。軍は「慰安所」に關与したのではなく、自分たちの身を守るための行為で、それから一步も出ていない。

「異常に多く実を結んだ果樹は枯れる前兆」で「種の保存の摂理の働き」と説明されるが、明日の命も知れぬ殺伐とした戦場の兵士たちにもこの「自然の摂理」の心理が働くと言われる。彼らに聖人君子か、禅宗の悟りを開いた法師の真似をしると要求することが可能なのだろうか。

現実には少ない給料の中から、その三分の一を「慰安所」に持って行ったことで証明されている。有り余った金ではなかったのだ。

「兵隊さん」と郷里の人々に旗を振って戦場に送られた名誉の兵士も、やはり若い人間なのだし、一方にはそうまでしてでも金を稼がねばならない貧しい不幸な立場の女性のいる社会が実際に存在していたのだ。

買うから売るのが売るから買うのかはともかく、地球上に人が存在する限り、誰も止めることの出来ないこの行為は続くだろう。

根源に人間が生存し続けるために必要とする性さが存在するからだ。

「従軍慰安婦」なるものは存在せず、ただ戦場で「春を売る女性とそれを仕切る業者」が軍の弱みにつけ込んで利益率のいい仕事をしていただけのことである。

こんなことで騒がれては、被害者はむしろ高い料金を払った兵士と軍の方ではないのか。

「正論」平成十七年一月号より

これが間違いのない真実なのです。

当時の日本の兵隊さんの給料は、月に13円から、将校クラスで25円です。

その時代に、売春婦のチョーセン人女性たちは、月にブスでも1000円、ちょっといい女なら2000円を稼いでいたといひます。日本に最初に来日して「私は慰安婦でした」と騒いだ婆さんは、売春婦当時、当時のカネで5万円の貯金があった。いまの相場で言ったら、10億円相当の貯金があったということです。

それが婆さんになって、売春行為ができなくなっても、まだ日本にタカレルんじゃないかと、恥も知らずに日本にやってきて、「ワタシ、キョウセイレンコウサレタ。ワタシフコウダツタ」と大騒ぎしてた。

そもそも「従軍慰安婦」という言葉自体が、間違いなのです。実際には、単なる「追軍売春婦」であり、商売女でしかない。この問題が、どういう経緯で国内外で問題視されたのかについては、以前のボクの記事「従軍慰安婦問題について考える」に詳しいので、そちらをご参照ください。

<http://nezu621.blog7.fc2.com/blog-entry-378.html>

【メルマガ会員募集中】

ねずプロのメルマガを購読し、と一緒に日本の良い話を拡散しませんか？ 購読のお申込は [こちら](http://www.mag2.com/m/0001335031.html) から。

<http://www.mag2.com/m/0001335031.html>